

DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research

21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

020

「チカーノ・スタディーズ」をめぐる論争：
「ヨーロッパ中心主義」に抗して

桑野（林）真紀

March 2007



<http://cner.law.hit-u.ac.jp>

Copyright Notice

Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.

All enquiries to cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp

「チカーノ・スタディーズ」をめぐる論争：『ヨーロッパ中心主義』に抗して」

(21 世紀 COE プログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点—衝突と和解」助成研究)

一橋大学大学院社会学研究科 地球社会研究専攻 桑野真紀 (SD032002/makita5266@yahoo.co.jp)

はじめに

アメリカ合衆国の多くの大学には、「エスニック・スタディーズ(Ethnic Studies)」という「学問分野」が存在する。この分野においては、それぞれのエスニック・グループの観点から歴史を書き換え、伝えていくことを目的としている。カリキュラムは多岐に渡り、アフリカ系アメリカ人の観点からの研究を志す「ブラック・スタディーズ(Black Studies)/アフリカン・アメリカンスタディーズ(African-American Studies)」、ラテンアメリカ系/メキシコ系アメリカ人のための「ラティーノ・スタディーズ(Latino Studies)/チカーノ・スタディーズ」、アジア系アメリカ人のための「エイジアン・アメリカンスタディーズ(Asian-American Studies)」が代表的なものである。これらの「学問」に共通していることは、1960 年代に頻発したエスニック・グループによる「運動」の一環として提起され、いまだ論争の渦中にあるということ、そして各エスニック・グループのアメリカ国内における地位向上のために行われている「研究」であるということである。従って、これら特定のグループの利益のための「学問」は、「ヨーロッパ中心主義的学問」が「エスノセントリズム (Ethnocentrism=自民族中心主義)」に置き換わったに過ぎず、「学問」ではなく「運動」であるという位置づけしか与えられてこなかった。¹

しかし人類学に対する批判を始めとする、昨今の「学問の中立性」「客観性」に向けられた疑問を省みるに、この「学問」が『学問』か『運動』か、ということ突き詰めることはさして重要ではないであろう。着目すべきは、「ヨーロッパ中心主義に抗する学問」としての地位を確立してきた「学問」において、「ヨーロッパ」とは何なのかということである。「運動」のキャッチフレーズのごとく、あまり深い意味を付与されずに使われている「ヨーロッパ中心主義」、または「ヨーロッパ」というものを、論争のなかから焙り出していくことが本研究の目的である。

本稿では、現在アメリカ合衆国最大の「マイノリティ」になろうとしているメキシコ系アメリカ人たちの創設した「チカーノ・スタディーズ」に焦点を当てる。アメリカ合衆国の一部の都市においては既に数的には「マイノリティ」の域を脱しながらも、未だ周縁的な存在であり続けている彼らの「学問」の変遷、そしてそれに関する論争を追いながら、この「学問」の持つ「矛盾」と「問題点」を検証する。なお、本研究のために 2004 年夏より 2005 年夏の一年間、そして 2006 年春の二度、アメリカ合衆国のロス・アンゼルスにて現地調査を行った。「チカーノ・スタディーズ」を学科として持つ主要な大学機関に滞在し、教員や学生へのインタビュー調査を行った。また、現地の図書館や研究機関にて、一次資料の収集を行った。

1. 「チカーノ」とは誰か？

本研究で使用している「チカーノ」とは、アメリカ合衆国で現在アフリカ系アメリカ人の人口を上回り、国内で最大の「マイノリティ」となろうとしているメキシコ系移民のことを指している。しかしこの「チカーノ」という呼び名は、我々にとって馴染み深いであろう「メキシコ系アメリカ人」「ヒスパニック」または「ラティーノ」といった呼び名とは異なり、政治性の強いものである。

あるチカーノ学生団体の標語は、「チカーノ」という言葉の定義を以下のように提示している。

「我々は誰しもチカーノ／チカーノとして政治的に生まれてきたわけではないことを認識している。チカニスは、我々がラサ(RAZA)に対する政治的な意識に基づき、それに身を捧げる決意のもと生まれたものである。従って、チカーノという言葉は、民族ではなく哲学に根拠を置くものである。」² (強調は筆者による)

「チカーノ」という呼び名は、メキシコ系の人びとが自らの出自、文化、先祖、土地に対する敬意を込めて使う呼び名であり、極めてナショナリスティックな表現とされる。1930 年から 40 年にかけて、ブラセロ・プログラム³の推進に伴い、多くのメキシコ人たちがアメリカ合衆国の農場労働者として「輸入」された。その折に、メキシコ人労働者たちは自らのことを”Mexicano (mesheecano)”をもじって”Chicano”と呼ぶようになる。やがて公民権運動を始めとする全米のマイノリティたちの自由を求める運動が巻き起こった 1960 年代から 70 年代にかけて、メキシコ系は互いの紐帯を強め、自らのルーツへの意識を高めるために「チカーノ」という呼び名を盛んに用いるようになった。彼らからすると「メキシコ系アメリカ人」という呼び名は、「アメリカに同化している」ことを意味していた。また、日本のメディアなどで頻繁に登場する「米国のヒスパニック」という表現は、メキシコ系の人々自身によって使用されることはあまりない。「ヒスパニック」は「スペイン人の子孫」という面を強調する表現であるため、メキシコ系の人びとのインディアンやその他の祖先との繋がりを軽視したものとして、好まれていない。「ラティーノ」という呼び名は、アメリカ合衆国においても一般的に使われている。これにはメキシコ系だけではなく、キューバ系、プエルトリコ系、中米系など、ラテンアメリカ出身者全般が含まれる。

チカーノ・ムーブメントの折にチカーノたちが求めた「自分たちによって自分自身を定義すること」(Self-definition)と「自分たちで決定すること」(Self-determination)に対する要求の一つの現れとして、アングロサクソンに名づけられた呼び名ではなく、自分たちによって自分たちの呼び名を決定し、誇りと敬意を込めて使ったのである。

よって「チカーノ」は他者から与えられた民族としての単純な「分類」ではない。ある種のナショナリズムへの「自覚」がこの呼び名に意味を持たせている。本稿ではこの「チカーノ」という呼び名が彼らによってナショナリズムを高める手段として使われ始めた時期に焦点を当てているため、「メキシコ系アメリカ人」ではなく「チカーノ」という呼び名を使用する。

2. 「チカーノ・スタディーズ」の成り立ち

アメリカにおける 1960 年代とは、それまで社会的に排除されていた人びとが声をあげ始め、社会に大きな揺らぎが生じた時代である。国内で連鎖的に起きたアフリカ系アメリカ人たちによる抗議運動と暴動、レッド・パワーと呼ばれたインディアンたちの抵抗運動、そして良妻賢母という伝統的な女性観からの解放・女性の新たな生き方の模索を訴える女性解放運動の盛り上がり等、価値観の多様化とそれに伴う国内の分裂は進行していった。これらの分裂の触媒として機能したのは、長引くベトナム戦争に対する反戦運動の高まりであったと言われている。ベトナム戦争反対の運動は、政府に対するさまざまな種類の不満を一気に噴出させる効果があった⁴。自らの権利の拡大を求めるあらゆるグループが反戦運動の波に乗って自己主張をするようになり、アメリカ国内はさまざまな主張の闘争の場となったのである。

60 年代のエポックメイキング的な運動として、まず公民権運動が挙げられる。公民権運動とは、アフリカ系アメリカ人が彼らに対する差別的待遇を撤廃し、白人たちと同等の権利を求めた運動である。1960 年代以前、アフリカ系アメリカ人に対する差別待遇は明確に法制化されていた。これは 1896 年のプレッシー対ファーガソン判決で、“separate but equal”（分離すれども平等）として公式に認められていたものである⁵。居住地域は学校に始まり水のみ場から公衆トイレに至るまで、「有色人種用」と「白色人種用」に分けられていた。有色人種は就くことの可能な職も制限され、1890 年の段階では 60% のアフリカ系アメリカ人は農業労働者であったと言われている⁶。1960 年以前の人種差別に関するデータが比較的アフリカ系アメリカ人に偏りがちであるのは、その差別が法制化され正当化されていたこと、そしてメキシコ系アメリカ人のなかには肌の白い者も多く、彼らは「白人(Caucasian)」とカテゴライズされていたからである。

このようななかで、差別を撤廃することを要求する声のアフリカ系アメリカ人の間で高まった。公民権運動は、マーチン・ルーサー・キング 2 世(Martin Luther King, Jr.)の指導のもと、「非暴力主義」が貫かれ、その信条はアフリカ系アメリカ人だけではなく、他の人種の共感をも得た。

チカーノたちによる人種差別撤廃運動も、アフリカ系アメリカ人たちの公民権運動に大きく影響を受けている。

さらに長引くベトナム戦争に対する国内の苛立ちの高まりと、国家に対する疑問の膨張が若者たちに発話のきっかけを与えた。第二次世界大戦では世論は一致して戦争を支持し、世代や階層、出身を超えて団結が図られたにも関わらず、ベトナム戦争では反戦運動が高まる結果となった。運動の先導となったのは、数々の大学で見られた「ティーチイン(Teach in)」と呼ばれる、学生と大学教員による政治集会・討論会であった。ティーチインにおける討論には、政党のスポークスマンやその他の戦争支援者も参加した。このティーチインが学術界における多くの若者たちの反戦に対する意識を目覚めさせ、やがてベトナム反戦運動という本格的な運動へと発展させることとなった。⁷

1965 年春、“Students for a Democratic Society (=SDS)”という団体が主催する、全国初の全国規模のデモンストレーションが行われ、20000 人の人々が参加した。引き続き、その年の秋には、首

都ワシントンで 30000 人を動員する抗議運動が行われる。ベトナム戦争が激しさを増すと、それに合わせて反戦運動も規模を増していった。反戦運動のやり方は合法的なデモンストレーションから草の根的な組織による運動、不服従によるロビー運動、書面による抗議など多岐に渡った。アフリカ系アメリカ人の公民権運動でリーダー的存在であったキングも、1967 年に戦争に対する抗議を行い、アフリカ系アメリカ人たちに反戦を呼びかけた。

反戦運動はニクソン大統領政権の折にピークを迎えた。1968 年、ニクソンが大統領に就任し、1969 年春にはニューヨークで 10 万人規模のデモ行進が起こった。そこで人びとは座り込みを行い、ベトナム戦争の死者の名前をひとつひとつ読み上げた。このデモが起こった月だけで、全国で延べ 200 万人の人がベトナム反戦運動に参加している。⁸

鈴木はベトナム反戦運動が「政府に対する様々な種類の不満を一気に噴出させる触媒のような効果を発揮する」こととなり、「ベトナム戦争が反政府運動化することにより、政府に不満を持っていた様々な自己主張が交錯する闘争の場と化していった」⁹と述べる。政府はベトナム戦争終結により国内の反戦運動が沈静化することを願ったが、結局はそれを発端として各地で芽づる式に運動が盛り上がっていくのである。ベトナム戦争開戦当初は、チカーノ・コミュニティにおいては戦争に反対する動きと支持する動きとに二分されていた。チカーノの若者たちの多くは「兵士」としてアメリカ国家に忠誠を示すことを誇りに思い、自ら戦地に派遣されることを志願した。これはアメリカ国内で当時蔓延していたイデオロギーのひとつであった。しかし国への忠誠を示すために戦地へ赴いたチカーノを初めとしたエスニック・マイノリティたちは、戦争で疲弊した体で帰還したのちもそれまでと変わらぬ差別に直面するという厳しい現実が待っていた。¹⁰

アメリカ国家に対するナショナリズムというベクトルが、この戦争を機に「チカーノ」であることに対して向かうようになる。これが「チカニズム」と呼ばれる、現在に至るまでチカーノたちの精神的な拠り所であり続けているチカーノ・ナショナリズムである。

この時代を「若者たちの発話の時代」として位置づける研究者もいる。チカーノ研究者のムニョスは、国内の人種差別や国外での軍事介入（主にベトナム戦争）に対し、千人を越える若者達が道路を占拠し自らの主張を訴える運動が次々と立ち上げられたこの時代は、1960 年代以前にはない「ドラマチック」なものであったと述べる¹¹。チカーノ史研究者アクーニャも、「それは二度と訪れないユニークな時代」であり、「理想主義と大きな期待の入り混じった時代であり、現在は忘れ去られているものである」¹²と語る。60 年代というユニークかつ革命的な時代を作り上げた若者達は、1922 年から 1927 年生まれの親たちから生まれたベビーブーマーたちである。その数、約一千百万人、誰もが 1929 年から始まる大恐慌時代の辛酸をなめ、第二次世界大戦においては出身、人種関わりなく共通の敵打倒に向けて結束した者たちであった。ベビーブーマーたちの多くが成人に達する頃、アメリカは経済の繁栄を見、そしてベトナム戦争へと突入した。それと共に多くの価値観が揺らぎ始める。アメリカ国内だけではなく、その波は世界を包み込んだ。なかでもアメリカを含む西洋世界が守ろうとしてきた世界の秩序、つまり植民地主義が衰退したことは、アメリカの若者たちの思想に多くの影響を与えた。

学生、学生ではないもの問わず、若者たちが一丸となって運動を起こしたことが公民権運動の他の時代には見られなかった特徴であり、現在では「社会問題化」しているストリート・ギャング

たちも、当時のアメリカでは運動の主体として参画していた。チカニスモ(Chicanismo)と呼ばれるチカーノ文化に対するナショナリズムは、社会階層を超えてチカーノたちを結束させた。運動に参画する者たちのなかにはアングロサクソン系の文化を厳しく批判する詩や文学を生み出す者も現れ、新たなチカーノ・アイデンティティの構築に寄与した。このときチカーノたちが要求したのが「チカーノ・コミュニティの政治経済的主導権」であった。そしてその主導権を握る場として、「学校」が特に注目された。チカーノの歴史や文化を教える学科を大学内に作ること、チカーノたちの母語であるスペイン語と英語を使ったバイリンガル教育を提供することなど、彼ら独自の「学問」の場を確保することを彼らは強く要求した。彼らにとってメキシコ文化を尊重することは「アメリカ人(gringo)の金本位のシステムを打ち倒し、チカーノたちの同胞愛を強める最強の武器」であった¹³

60年代、運動の中心となった若者たちにとって、不満の中心は大人たちの順応主義や利己主義にあった。彼らは大学の外に積極的に出向き、特に黒人たちの公民権運動に参加し、社会に変革を起こすことを訴えた。しかし問題の所在を大学の外側に向けていた学生たちも、次第に大学内部にはびこる多くの問題に目を向けるようになる。彼らは大学に存在する教育内容の不備や人種差別をターゲットとし、自分たちにとって最も身近な大学という場所に向かって闘争を挑むようになる。¹⁴

チカーノ学生たちもこの学生運動のなかで中心的役割を果たした。彼らは大学において自分たちの居場所を確保すること、そして既存の学問体系に規定されない、チカーノの視点からチカーノの歴史を描くことを要求した。やがて1969年3月、コロラド州デンバーにおいて“Chicano Youth Liberation Conference”が開催される。これはチカーノ学生たちの歴史において画期的な集まりとなった。この会議は、国内のチカーノ学生運動家たちが一同に介した最初のものである。学生でない者も参加していたが、大部分は学生であった。参加者たちはここで大学の制度に関する意見交換を活発に行った。

会議を主催したコーキー・ゴンザレスは、60年代以前のチカーノたちは、大学で専門教育を受けると自らがメキシコ人であるということに対して執着がなくなりがちであると批判した。これは大学という場で人びとがアメリカ化されてしまい、個人主義といったアメリカ社会の規範に飼いならされてしまっているものだと言った。このようなチカーノ学生たちの「心理的植民地化」を阻止するためにも、ゴンザレスはチカーノ学生たちが「革命的役割」を果たすことを呼びかけたのである。¹⁵

1000人近くのチカーノたちが参加したデンバー会議は、チカーノ学生たちの指針を定め、ナショナリズムを高めるうえで予想以上の成功を見た。その一ヵ月後、引き続きカリフォルニア大学サンタバーバラ校でデンバー会議と同様の趣旨で会合を催された。この会議はデンバー会議のようにネーションワイドのものではなく、主にカリフォルニア州のチカーノの団結を強めることが目的であった。この会議においては、カリフォルニア州の学生と教員、大学職員のネットワークを強化し、より多くのチカーノ学生たちに大学という高等教育機関への門が開かれるように、という要求が出された。この会議の開催が発端となり、大学内でのチカーノの運動は本格的になっていった。これまでの「ヨーロッパ中心主義的」な観点から描かれた歴史ではなく、アングロサ

クソン系の視点から描かれた歴史でもなく、チカーノの視点からその歴史を書き換えようという若者たちの運動のもと、「チカーノ・スタディーズ」は設立されたのである。

3. 「社会運動」か「学問」か？ 「チカーノ・スタディーズ」をめぐる論争

－「枠組み」の曖昧さ

「チカーノ・ムーブメント」がピークを迎えた 1960 年代後半には、80 の大学・組織が「チカーノ・スタディーズ」という学科／プログラムを設置したが、その「学問」が一体どのようなものなのかという具体的な定義はないままであった。「学問」の枠組みを問い直すという大義名分も、自らの枠組み自体が曖昧なままでは説得力がなく、修士／博士の学位を提供することができる組織もごく稀であった。アメリカ国内における最初の「チカーノ・スタディーズ学科」は、1968 年にカリフォルニア大学ロス・アンゼルス校（UCLA）にて設立された¹⁶。政治学の教授であったラルフ・グスマンが最初の学科長に任命されたわけだが、既存の学問体系を組み合わせた学際的な学科を目指すグスマンの姿勢は、学生たちの反感を買った。しかし多くの州立大学においては、急進的な学生運動家たちの意見を学問領域に反映させることが困難であった。

－「客観性」「中立性」の否定

やがて「枠組み」の曖昧さという弱点を強化すべく、「チカーノ・スタディーズ」の基盤を確立するためのプログラム”Chicano Studies Institutes(CSI)”が立ち上がる。コロラド大学ボルダー校、アリゾナ大学ランプ校、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校が、「チカーノ・スタディーズ」を発展させるために連合し、カリキュラムの基準を設定した。また「チカーノ・スタディーズ」が目指す目標として、いずれの大学／組織も下記の内容を共通して追従した。¹⁷

- 1) メキシコ系アメリカ人のアメリカ社会・文化に対する貢献についての研究をすること
- 2) メキシコ人のアメリカ文化／政治／歴史／経済への貢献を伝えることを通し、全てのアメリカ人に理解が深まること
- 3) 法律関係、社会福祉事業、教育、広告、民間事業、その他メキシコ系アメリカ人が疎外されてきた職種に携わっている人びとに情報を広めること
- 4) 自分たちの遺産を誇りに思い、サウスウエストのコミュニティを形作ってきた文化を知ること、チカーノたちの高等教育を推進すること

チカーノたちはここで既存の学問体系で前提とされてきた「客観性」や「中立性」を完全に否定している。これには 1960 年代、70 年代の公民権運動や「新しい歴史観」を求める運動が結びつき、ボトムアップから歴史を描こうという潮流が反映されている。結果的に、チカーノの歴史はチカーノ・ナショナリストたちによって描かれることとなった。「チカーノたちによるチカーノたちのための学問」、この姿勢の「過激さ」または「非科学的なアプローチ」が、「チカーノ・スタディーズ」を学問として認めない側の標的となってきた。1970 年 5 月の調査によれば¹⁸、調査

対象となった大学学長のうち 75%が「チカーノ・スタディーズは大学で特に必要としない」という回答を寄せている。現在では全米で 50 以上の大学が「チカーノ・スタディーズ」を有しているにも関わらず、大学内ではマージナルな位置づけを余儀なくされており、その周縁的な位置づけの最たるものが「チカーノ・スタディーズ」が毎年悩まされているという研究予算の削減である。予算削減という圧力のなかで教鞭をとる当学部の教員たちは、「学問的な義務を果たしているのではなく、ボランティア活動やコミュニティ活動の一環」と捉えられている。また、「チカーノ・スタディーズ」を社会学／歴史学／人類学／政治学といった既存の学問のなかに取り込もうとする動きもある。しかし「チカーノ・スタディーズ」はそれに携わる教員にとっても学生にとっても、「チカーノの権利が大学側に認められているのかどうか」を知る指標であるとともに、「知識を定義する権力は誰が持っているのか」「学問の正しい形を決定するのは誰なのか」「主流と周縁を定義するのは誰か」ということを問い返す場でもある。よって、彼らにとっては「既存の学問のディシプリンに基づいて研究をしても何も意味がない」のである。¹⁹

「チカーノ・スタディーズ」設立の先駆けとなったのが、M.E.Ch.A(El Movimiento Estudiantil Chicano de Aztla'n / The Chicano Student Movement of Aztlan)というチカーノ学生たちの運動組織である。チカーノ学生たちの決起集会でたてられた「誓い」は M.E.Ch.A の出発点であり、現在も「チカーノ・スタディーズ」の授業などで繰り返し引用されている。ここにはチカーノたちにとっての「ヨーロッパ」とは何かが如実に浮き彫りにされている。

以下は宣言文、”El Plan Espiritual de Aztla'n”である。

「我々の誇り高き歴史的遺産と、そしてまた我々の領土を侵略した野蛮なアメリカ人(gringos)について気付きを得ている新世代の者たちの精神において、我々チカーノというアストランの北の住人であり文明人は、我々の祖先の生まれた地を取り戻し、我々太陽の子達の決意を捧げる。我々の血の呼び声は我々の力であり、責任であり、避けられぬ運命である。我々は自らの家や土地、そして額の汗、心臓が要求する労働を決める自由があり、その主権は我々にあるのだ。アストランは種を撒き、地に水をやり、穀物を集める者たちのものである。断じてヨーロッパ人たちのものではない。我々のブロンズ大陸において、国境が容易に引きなおされることなど認めはしない。同胞への愛こそが我々をまとめ、我々民族が『アメリカ人(=gabacho)』という我々の資源を食いにし、文化を破壊する連中と戦う力を与えてくれるのである。この土地で、我々の手の中にある心臓とともに、我々はメスティソ国家の独立を宣言する。我々はブロンズ文化を持つブロンズ民族である。世界が始まる前、北米が成り立つ前、そして我々の仲間たちが生まれる前、我々はひとつの国家だったのである。我々は自由な地域共同体だったのである。我々はアストランである。」²⁰

彼らのナショナリズムは「メキシコ人であること」ともう一つ、「征服者」としてのアングロサクソン系への敵対心を基盤にしている。この後も現在に至るまで、そのナショナリズムが常にアングロサクソン系への嫌悪感から発している。そのスタンスは、「チカーノ・スタディーズ」と同じくする。そしてチカーノにとっての「ヨーロッパ人」とは、「スペイン人」と「アングロサクソ

ン系アメリカ人」の二種類のみを表していることが分かる。彼らにとって「ヨーロッパ人」とは実態のない、敵意を持つべき象徴でしかないのである。

M.E.Ch.A は「チカーノ・スタディーズ」の中核を支える学生団体として機能してきた。「チカーノ・スタディーズ」の教員たちは、いざ大学の組織の一部として動こうとすると、次第に保守的、伝統的なやり方に固執するようになっていった。これに危機感を抱いた M.E.Ch.A のメンバーたちは「チカーノ・スタディーズ」のプログラム運営に積極的に関わるようになった。しかしプログラムが大学側には是認され、資金をもらう段になると、学生たちの立場はすぐに周縁化されてしまうのであった。チカーノ・ムーブメントも下火になった 1970 年代前半には、もはや M.E.Ch.A は「チカーノ・スタディーズ」に大きな影響を与えることができなくなってしまった²¹。

ー 「ヨーロッパ中心主義」を「乗り越える」とは

「チカーノの視点から描いた歴史」ーそれはスペイン人によるメキシコの征服、そして 1848 年のアメリカメキシコ戦争によるメキシコの領土割譲、つまり「スペイン」「アメリカ」による二度の征服の歴史であると言える。「我々が国境を渡ったのではなく、国境が我々を渡ってきたのだ」と語るチカーノたちは、その歴史を征服者への強い非難の言葉によって綴り直していった。その歴史は、「チカーノ対アングロサクソン」という二分法が取り入れられている。サラゴサはこの「チカーノ・スタディーズ」の政治性の強いアプローチを「彼ら対我々」(“Them-versus-Us”)のアプローチと名づけている²²。これでは、チカーノたちが苦しめられてきた「他者」というカテゴリーを覆すために、新たな「他者」を作り出しているに過ぎない。

これは「ブラック・スタディーズ」／「アフリカン・アメリカンスタディーズ」と呼ばれる、「チカーノ・スタディーズ」に先立ってアフリカ系アメリカ人たちが立ち上げた学部にも共通して存在する問題点である。他学部とは孤立した教室、寮、協同組合、学習室、劇場…そしてアフリカ系アメリカ人のみによって構成された教師陣と生徒たち…。これでは白人たちが行ってきた「人種、肌の色による差別」を逆にして実践しただけに過ぎない、という危惧が大学職員の間で生まれ、遂には政府の公民権部門から勧告が出されるまでに発展した。勧告の内容は、1) 人種に基づく学生の住居隔離、2) 社会活動の場の隔離、3) 人種・肌の色に基づく大学、教育組織の隔離に対してであった。この勧告との関連で良く知られているケースとして、アンチオック大学が連邦基金のうち 150 万ドルを削減される危機にあったことが挙げられる。政府はアンチオック大学に、「ブラック・スタディーズ」の規定が白人を含めるように策定されていなければ、1964 年の公民権法に違反することを再三に渡り勧告していたのだった²³。

昨今のイラク戦争泥沼化においても、「白人のヤツラが戦争に行けばいい」というような過激な意見が「チカーノ・スタディーズ」の学生間に飛び交った。また、教員たち、学生たちが多用する “We, Mexicans” (「我々メキシコ人」) という代名詞は、彼らが最も忌み嫌っていた「他者」というカテゴリーを、チカーノ以外の人びとに味わわせしめるという矛盾を抱えている。「他者の排除」という構図によって「ヨーロッパ中心主義」を乗り越えていくことは不可能である。それは「ヨーロッパ中心主義」の裏返しでしかない。

ー 「コミュニティ」との乖離

60年代アメリカにおける社会運動の頻発は、若者たちを政治のアリーナへと立たせ、政治に対する意識の変革を促した。それと同時に、国内における「コミュニティ」の性質に大きな変化がもたらされることとなった。「コミュニティ」は、国内で圧倒的に不利な立場にあったチカーノたちにとって、政治的な活動を起こすことを可能にする場となったのである。

チカーノたちにとっては、正式な政治の舞台に自分たちのリーダーを打ち立てることよりも、コミュニティベースの小さな運動や組織のほうが重要であった。チカーノ・ムーブメントにおける「コミュニティ」単位での政治活動は、チカーノたちにとっての「コミュニティ」という存在に神聖性を付与した。「コミュニティのために」という言葉はチカーノたちを結束させる強力なイデオロギーとして機能し、地理的な括りを超越した精神的な拠り所として語られ続けている。

「チカーノ・スタディーズ」の掲げる「使命(mission)」のなかにも「コミュニティのため」という言葉が頻繁に出てくる。「チカーノ・スタディーズとはコミュニティの問題をともに考えていく文化的中心地である。そしてこの中心地はコミュニティの問題を解決するための研究活動を支援するのである。」²⁴という言葉に表されているように、「チカーノ・スタディーズ」においては「コミュニティ」の存在を大前提として捉えている。ここでもまた、チカーノにとってのコミュニティと個人の関係性が、「ヨーロッパ中心主義思想」に基づくそれとは対照的な構造をとっていることは特筆すべきことであろう。すなわち、個人の確立を上位的前提としてコミュニティを構想する「ヨーロッパ中心主義思想」に対し、チカーノはコミュニティの存在を大前提と捉え、そのなかに個人を位置づけようとする。

しかしながら「大学」という場所に埋め込まれた「チカーノ・スタディーズ」は、「コミュニティのため」というキャッチフレーズを標榜しつつも、「コミュニティ」というものから教員も学生も離れていってしまうことが矛盾の一つであろう。ある教員は、「コミュニティに住んでいる人たちは『コミュニティ』が生活の全て。私たちににとっては部分的なもの。」²⁵と言っていたが、業務／学業に忙しい教員／学生たちは、「コミュニティ」そのものとの関わりが制限されてしまうようだ。特に昨今のアメリカ合衆国の州立大学の授業料値上がりは、「コミュニティ活動」に参加しようという学生たちにとっては障壁のひとつとなっている。

そもそも60年代、70年代に盛り上がったチカーノ・ムーブメントの衰退は、この授業料の値上がりが要因として大きかった。学生たちは値上がりした学費の支払いに迫られ、運動よりもパートタイムの仕事に時間を費やすようになったのである。チカーノ学生たちのイデオロギーは、より個人的なものへと移り変わっていった。チカーノ学生たちのなかには、自分たちが「チカーノ」と呼ばれることを拒む者も現れた。キャリアを求めたチカーノ学生たちは、ビジネス団体、法律団体、薬学団体等の自らの個人的なキャリアに関連した団体を作り出し、そこに拠り所を求めるようになるのである。²⁶

学生たちは大学教育を受け、貧困と犯罪の巣窟のような「コミュニティ」を抜け出し、ビジネスや他コミュニティに拠り所を見出していく。「コミュニティのための学問」を謳い、「コミュニティ活動」を各授業で義務として提示している「チカーノ・スタディーズ」であるが、大学教育というプロセスが結果的に「コミュニティ」からの乖離を促している点は、この「学問」が抱え

る最も大きな矛盾なのかもしれない。

4. 結びにかえて

2006年5月1日、全米の大都市でチカーノたちによる大規模な抗議運動が起こった。これまでアフリカ系アメリカ人などに較べるとあまり関心を持たれていなかったチカーノが、突如日本のメディアでクローズアップされることとなった。チカーノたちの抗議の主なターゲットは、移民法の改正である。不法移民は強制送還に付すという法案が可決されれば、低賃金の不法移民の労働によって賄われている工場や商店などは大打撃を被るであろう。アメリカにおいてはもはや「不法移民」は「合法化」しており、彼らなしでは経済が成り立たない構造になりつつある。チカーノが人口の半分以上を占めるロス・アンゼルスは不法移民の力によって支えられる代表的な都市である。このような新しい移民法について論議がなされるようになった理由として、アメリカの白人社会は「不法移民の福祉・教育に自分たちの税金が取られているから」だということを叫び続けている。しかしながら、本当の理由は、チカーノたちの急激な流入・増加によって白人をマジョリティとした「白人中心社会」が崩壊していく脅威にさらされていることではないかと考えられる。アメリカのエスニック問題について触れるとき、必ず「敵」として想定されるのは「白人」である。チカーノ社会においてはそれが顕著であり、彼らは「白人」という共通の「敵」を設定することでグループ間の団結を強めてきた。「チカーノ・スタディーズ」はその「共通の敵」への抗議・怒りに、「学問」として理論やディシプリンをかぶせていったものである。当然、そこには「正当な学問」を学んできた者には受け入れがたい要素が数多く見受けられる。自由な議論を許さない風土、ともすれば「感情的」になりがちな議論、そして「チカーノ」以外の参加者が参入できない圧倒的な障壁。それが「学問」として認められるのか、という質問をここで投げかけることは、これまでの議論の繰り返しになるので避けた。しかし「白人対チカーノ」という二項対立的なアプローチには問題はあれども、「ヨーロッパ中心主義」を乗り越えようという学部・学科が大学内に数多く存在することが「学問」に活力を与えているのだと考える。「チカーノ・スタディーズ」（そしてその他のエスニック・スタディーズも同様）に関しては、存在することそのものに意味があるのではないだろうか。そもそも「学問」が「ヨーロッパ中心主義的」であり、そこから排除されている登場人物がいる、ということなど、問い返す人がいなければ誰も気にはしないことかもしれない。「ヨーロッパ中心主義」とはそれほど我々の生活に深く浸透しているものである。そういう意味で、このような議論が大学で日常的に繰り広げられているというのは、貴重なことである。調査最終日のインタビューである女性教授はこう言った。「学問として成り立つか成り立たないかではない。Ask ^{問い返す} back することに意味があるのだ」

¹ Asante, Kete, *The Afrocentric Ideal* (Philadelphia: Temple University Press, 1998), pp. 1-5

² California State University, Northridge チカーノたちによる学生団体である MEChA が配布していた広告ビラより抜粋

³第二次大戦期、多くのメキシコ系アメリカ人が戦争に駆り出されたため、農場労働者や鉄道建設のための労働者

が不足した。また、第二次大戦によって「敵国の人間」となった日系アメリカ人が強制収容所に入れられたことにより、農場労働者の不足は一層深刻になった。結果アメリカ政府は1942年にメキシコ政府と協定を結び、メキシコから季節労働者を輸入するという合意に至った。これが「ブラセロ・プログラム」である。1942年から1947年の間に二十二万人のメキシコ人が「輸入」され、プログラムが廃止される1964年までの間に五百万人のメキシコ人がアメリカに労働者として連れて来られた。(参考資料: Acun~a, R. “*Occupied America: A History of Chicanos*”, Longman, New York, 2000, pp. 285-289)

⁴ 鈴木透, 『実験国家 アメリカの履歴書』, 慶應義塾大学出版会, 東京, 2003, p. 147

⁵ Parkes, Henry and Vincent P. Carosso, *Recent America* (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1963), pp. 455-456

⁶ Weinstein, Allen, *The segregation Era: 1863-1954 A Modern Reader* (New York: Oxford University Press, 1970), pp. 266-279

⁷ Wells, Tom. “The Anti-Vietnam War Movement in the United States”, in Lowe, Peter(ed), *The Vietnam War* (London: Macmillan Press LTD, 1998) p. 116

⁸ Wells, T., *Ibid*, p. 118

⁹ 鈴木透, 『実験国家 アメリカの履歴書』(慶應義塾大学出版会, 2003) , 147 ページ

¹⁰ Ybarra, Lea and Edward James Olmos., *Vietnam Veterans: Chicano Recall the War* (Austin: University of Texas Press, 2004), p. 5

¹¹ Mun~os, Carlos, JR, “*Youth, Identity, Power: The Chicano Movement*”, Verso, 1989, p. 1

¹² Acun~a, R. “*Occupied America: A History of Chicanos*”, Longman, New York, 2000, p. 328

¹³ *Ibid*, pp. 76-77

¹⁴ 鈴木, *Ibid*, p. 143

¹⁵ Mun~os, *Ibid*, p. 76

¹⁶ 当時、大学のキャンパスで次々に立ち上がったUMA S (United Mexican American Students)による抗議運動への対応策として設立された。

¹⁷ Corinne, Sa’nchez, ‘A Challenge for Colleges and Universities: Chicano Studies’, “*Civil Rights Digest*”, Volume.III, No. 4, Fall 1970, U.S. Commission on Civil Rights, Washington D.C. , pp. 37-38

¹⁸ Mun~os, *Ibid*, p. 76

¹⁹ <http://www.neiu.edu/~tbarnett/102/race.html> (“Immigrants in Our Own Land: The Chicano Studies Movement at UCLA”)

²⁰ “El Plan Espiritual de Aztl’a’n” *Aztl’a’n*, Spring 1970, Volume I , No. 1, pp. 4-5

²¹ Mun~os, *Ibid*, pp. 88-89

²² Salagoza, Alex, ‘Recent Chicano Historiography: An Interpretive Essay’, “*The Chicano Studies Reader 1970-2000*”, Ed. Noriega, Chon., Avilla, Eric and others, UCLA Chicano Studies Research Center, Los Angeles, 2001, pp. 120-121

²³ Johnson, W., ‘Black Studies: The Case for and against’, “*Civil Rights Digest*”, Volume.III, No. 4, Fall 1970, U.S. Commission on Civil Rights, Washington D.C. , pp. 33-34

²⁴ UCLA, Minnie Ferguson の言葉, <http://www.neiu.edu/~tbarnett/102/race.html>

²⁵ 2004年8月のカリフォルニア州立大学ノースリッジ校の「チカーノ・スタディーズ」の教員に対するインタビューより

²⁶ Acun~a, *Ibid*, pp.414-416